

That's きつとす 令和元年 7月

水辺とホタルの密接な関係

6月下旬から7月にかけて、各地でホタル観察会が盛んに開かれます。天覧山麓の谷間でもホタルの里と呼ばれる場所があり、夜になるとゲンジボタルとヘイケボタルが光りながら飛び交う風景が見られます。

これらは幼虫の期間を水中で過ごす水生ホタルで、水と深く関わりながらその一生を過ごします。例えば、幼虫はカワニナなどの巻貝を食べるため、餌となる小さな生き物が豊富に生息し、酸素が多く溶け込んだきれいな水を必要とします。このときに十分に成長できなければ、翌年に成虫になることができません。また、土の中でさなぎになるためには、上陸しやすく潜ることができる、湿った柔らかい土でできた水辺があることが重要です。産卵は、生まれた幼虫がすぐに水に入れるように、水面に張り出した木や苔のある場所にします。つまりホタルが生きていくためには、きれいな水だけではなく、水辺全体の環境が大切な場所なのです。

ホタルの里には、山に囲まれた小さな沢と、沢水を引いた田や湿地、草地がつながるように広がっています。特にここにある田では、冬に水を抜かない昔ながらの稲づくりをしているため、常に水を必要としているホタルが住みやすい環境が整っているのです。ホタルは私たちに、沢水はもちろん、周辺全体の環境を含めて守ることの大切さを教えてくれます。(本橋)

